

## 座長講評（午前の部）

山口大学経済学部教授、  
地域経済研究センター客員研究員 吉村 弘

早速ですが、初めの方の広実さんですが、労働市場、特に製造業の高齢化のことについてご報告頂きました。そのテーマの重要性とそして特にデータを丹念に分析していただき、私もコメントを頂きました森岡先生と同じように前もってペーパーを頂いていますが、大変大部なもので丹念に分析されていることが分かります。時間が短くて全貌を報告して頂けなかったのが非常に残念に思っている所です。まさに選ばれたテーマの重要性と丹念な分析について敬意を表したいと思います。既に森岡先生からもあるいはフロアーからもコメントがございましたが、できるだけダブらないようにして、3つ4つお話させて頂きたいと思います。

先ず第1はテーマである就業の場あるいは少し狭く言えば雇用力ということですが、その日本及び地域における重要性ということですが、今確かに景気が悪いわけですが、こういう短期的、循環的な重要性もあろうと思います。しかしそれはそれとしまして、もっと構造的、中長期的な点があると思います。人口の規模及びその構造の変化と人々の労働に対する意識の変化、それから国際的に労働の移動が起こる気配があります。そういう点からの、今までになかったような、長期的な構造的な変化がくると思いますが、その点で重要性があると思います。しかしそれは全国的なことですから、特に地域だけに限ることではないと思います。もう一つ重要な点は、地域における雇用力といいますが、就業の場の重要性です。確かに通産省や国土庁の計画などを見ましても、生産とか出荷額とか取引高とか、もう少し身近なものでは付加価値、所得でいろんなものを測っています。私はそれは当たっていると思います。特に付加価値生産性というのはまさに重要だと思います。しかし、こういう言葉を時々学生に話すのですが、「稼げと稼げと地元潤わず、じっと煙突を見る」ということです。東京や広島ではちょっとそういう感じが少ないかと思いますが、ぐっと地方に行きますと、「稼げと稼げと地元潤わず、じっと煙突を見る」煙突だけではなく今は鳥小屋を見るというものもあるかもしれません。そういう感は否めません。つまり稼ぐんです、生産するんです、付加価値をつくりだすんです。でも地元にし少し残らないのです。そういう点は地域では非常に重要なわけです。そういう点から見ると労働力、つまり雇用力というのはそこに住んでいる人ですから、まさかここから北海道まで通勤する人はいないでしょう。そうしますと地域にとって重要

な指標は生産や出荷や取引高ではなくて、付加価値もより近いのですが、更に労働力つまり賃金支払い総額に注目すべきであって、地域に対する貢献は出荷や付加価値ではなくて労働力を見るのがいいわけです。とりわけ日本のように賃金格差の少ない所であれば尚更そうです。付加価値の一部は利潤になりますが、利潤・配当はかなりの部分が地域の外に出ていくわけです。そしてその実態はなかなか今よく掴めていません。とりわけ県のレベルよりも、もっと小さな市町村のレベルになればなるほど問題が大きいと思います。そういう点で地域における雇用という、あるいは就業ということの重要性を見直していく必要があると思います。特にこの労働力の点では、今のように全国的に長期的な問題と地域における問題は違う問題だと思いますが、いずれも重要性を持ってきていますし、ますますそうなるのではないかという気がします。そういう点から見ると、製造業というものと、もう一つ雇用力の高いサービス業といいますが、そちらがまた別の点でおそらく地域において注目を浴びてくるのではないかという気がします。これが第1点です。

第2点は理工系の製造業離れの問題を扱っておられました。確かに大きな問題であると思いますし、私にも由々しき問題だと思っています。それにつきまして二つありますが、一つはいろいろご報告頂きましたが、直接に学生や大学院生やあるいは今卒業したばかりの、就職して1～2年のフレッシュマンの、とりわけ理工系の出身者に直接アンケートして、何故貴方は製造業に行ったのか、商社に行ったのか、金融に行ったのか、あるいは行くつもりなのかということダイレクトに尋ねてみたら如何であったかと、そんな気が致します。ここにあるように、いろいろな社会的な地位のある方々に、間接的に尋ねていますが、こういう方は年輩の方が多いわけです。でも今の若い人達とは感覚がずれています。昨日も私は追い出しコンパにでましたが、学生が歌う歌は殆ど分かりませんし、私が歌う歌は学生は殆ど分かりません。そういうふうな状況でかなり感覚がずれている人から聞くより、靴下の上から搔かずに直接搔くというやり方もあるのではないか。そしてこの事はやはりいっぺんどこかでやってみる必要があると思います。特にその点では賃金と賃金以外の労働条件、例えば達成感とか昇進とかポストとか、二つに分けてやってみるといいのではないのでしょうか。私は企業に行っている理工系の出身の人に尋ねたら、何と言っても賃金がいいからねと言っていましたから、まだ賃金の点はそれほど無視できないのではないかという気がしていますので、賃金が理工系の人をサービス業に引きつけるのか、金融業に引きつけるのか、もう少しそのあたりを直接調べてみることもあり得るのではないかという気がしました。

それから小さな点ですと、今の賃金の比較のところ、製造業とサービス業の賃金の比較をしていましたが、当然ご存じのことだと思いますが、学歴とか性別・年齢によってかなりな違いがあります。とりわけ学歴によって違いがありまして、サービス業と製造業では学歴の差、特に金融と製造業では学歴の違いがすごく大きいですから、そのまま賃金が高い低いと言っても、全体としての金融業と、全体としての製造業を比べて賃

金が高い低いがあるのは、製造業であるが故の違いではなくて、学歴の違いである、あるいは規模の違いであることもあります。規模の違いはご報告の中では規模別のものがありますからいいと思いますが、学歴の違いというのは非常に大きいと思います。特に金融は学歴が高いわけですから、そういう点を区別することも必要かと思います。これはおそらくご存じだったと思いますが、データーが国調の10年毎の大国調以外ないから、おそらく出来なかったのではなかろうかと思っています。理工系の製造業離れについてはダイレクトに尋ねてみる必要があると思います。私もやらなければいけないのかもしれませんが、そういう気がしました。

第三点はグラフで全国と中国とを比較するのであれば、例えば2-3図とか2-4図であれば、それを一つの図に書く方がいいと思います。しかも最近の新しいグラフのソフトウェアを見ると、単純に1本の線で書けばいいことを3次元のように書いてあります。この3次元の図は私は非常に見にくい図であると思いますが、報告者のせいではなくソフトのせいですが、3次元にした方がいいこともあるけれど、この場合はむしろ分かりにくくなっています。もっとダイレクトにやられた方が私は好きです。それから小さな点ですが、初めのところで労働と資本の代替、資本の装備率のような問題がありました。大変重要な点を指摘しておられると思っています。ちょっと難しいことなのですが、こうなりますと結局、賃金コストと資本コストはどちらが安いかによってシフトしていくわけですから、賃金コストと資本コストの比較の点から見て、つまりもう一つフィルターがはいるわけです。生産性というフィルターが入っていますが、その時に価格という点のフィルターを入れるのも、もう1歩進めるやり方かなという気がしました。大きな点小さな点取り混ぜて申し上げさせて頂きました。

二番目の宗近さんの方ですが、下関の特長と問題点を指摘されていて、非常に要領がよくて山口県に住んでいない人でも、下関の大雑把なところを掴めたような気がします。それを基に情報化のところにごっと焦点を合わせて持っていったというのは、さすがだなというふうに関心しております。

三点ほどコメントさせて頂けたらと思います。鯉坂先生からすでにありましてすこしダブルかもしれませんが、先ず第1点は何故将来の方向性というときに情報化ということになるのかということについてですが、情報化だったら下関でなくても今だったらどこでもあるかもしれない、何故下関でもあるいは下関こそ情報化なのかということについて、もう少し何か敷衍して頂きたいなという気がしました。そのようにするためには、情報化が他の産業や生活の点で下関のいろいろな、今提案されているプロジェクトをまとめる上で非常に重要なんだという観点で、いろんなプロジェクトを挙げてそれが都市情報化と結び付けるとこんなふうに関わっていくんだというふうなのがあるといいかなという気がしました。

二番目は情報サービスの就業者が少ないということから、情報化へと論を進めていかれたわけですが、フロアからのコメントにもありましたが、それだったら弱さを補うと

いう発想のように見えるわけです。しかし、これもコメントにありましたが、強さを伸ばすという発想もあろうと思います。そうすると都市情報化ということが下関の強さ、たとえば国際性とかあるいは水産業とか、関門海峡とか観光とかあったと思いますが、それを伸ばすという点で情報化が非常にプラスなんだということを、もう少し強く打ち出されたらどうかと思います。

第三点は、これは少し超越的なことになるかと思いますが、情報化のあり方も変わってくるのではないかと思います。つまり下関はアジア特に韓国の情報を集積させるのにメリットがあるということを私も言ってきました。下関はせいぜい人口25～6万ですから、あれこれやったとしても始まりません。しかし釜山の情報は下関に行ったら全て分かりますと、釜山の商工会議所の会頭が誰で、1年前は誰で、専務は誰で、今どんなことを考え、何が一番問題で、どうして港のハブにしようとしているのか、そういう釜山の問題について韓国のソウルはどう考えているのかということまで、下関でみんな分かるというのが下関が目指すべき情報化の方向だというふうに私も今まで言ってきました。暫くはそれで私は当たっていると思います。しかし今のインターネット革命のようなを見ますと、事情は違うと思います。インターネットに代表されるような世界的なネットワーク化ということは、後に引かないすごい大きな流れであって、このことこそ大事だと思います。その点から考えると、釜山の情報が必要なら釜山に直接聞けばいいわけです。韓国のことを聞きたければ直接聞けばいいわけで、下関を経由することはなくなるわけです。そうすると下関が釜山の情報を集約するという点でのメリットは減ってくると思います。今から10年間は大丈夫かもしれませんが、やがて駄目になります。つまり情報化に対する対応の仕方は変わるのではないかと思います。そうなった時には何が生き残りにとって重要かという、集めることではなくてそれを加工するとか、付加価値をつけるとか、分析するとか、何かがないと単に集めてきただけだともうだめだということです。今のアメリカのホワイトハウスではデータを只で送ってくれるようですから、そうなるとうざわざあちこちの図書館に行くことはないし、直接聞いた方がいいし、しかも只なんですから、そういうふうな点から考えると、これは下関に限りませんが、情報化に対する対応の仕方は今後変わるのではないかなという気がしました。

## 座長講評（午後の部）

愛媛大学工学部教授、

地域経済研究センター客員研究員 柏谷 増男

午後からの三編はいろいろな問題を取り扱っていきまして、大変バラエティに富んでいました。いずれの発表者も大変綿密な実証分析をされていきまして、様々な角度から多面的にテーマに対して取り組んでおられたということが印象的でした。さて、私どもはこういう学会であれ研究集会であれ、参加した一つの楽しみは、発表者と討論者との間にはどういふふうなやり取りが成されるだろうかということです。かつて発表者の発表を聞いても何も分からなかったけれど、コメンテーターがコメントすると全部よく分かったというような意見もありました。コメンテーターをどなたにやって頂くかというのも、これもまた大変な楽しみの一つです。午後の発表者は三人とも若い方でして、大変真面目に初々しく行われたのではないかと思います。程度の差はあるかもしれませんが、コメンテーターの方々はどこかというのとベテランの方でした。実は今年の初場所で、愛媛県では史上初の敢闘賞だった玉春日という力士がいますが、彼は前半どんどん勝ちますと後半には強い力士と当たるわけで、あと一番勝ちたいなという時に広島出身の安芸島に当たると、やはりうまいこと料理されるわけです。しかしながら料理されたからといって玉春日が駄目かということではなくて、彼にはまた明日もあり来場所もあるわけで、そういう点では若い人ががんばって頂きたいと思うわけです。今日のコメンテーターの皆さんは、発表者のかたには悪いのですが、やはり一枚上手であったということです。いろいろ技はあったかもしれませんが、コメンテーターの皆さんの方がいい面白いお話をされたような気がします。発表者の方々は何と言っても若さは武器でありますので、これに負けずにまた今後いい発表をして頂ければと思います。

最初の野津さんの発表は「鳥取県の交流人口に関する基礎調査」ということでして、私は大変面白いテーマだと思いました。と言いますのは、皆さんもご存じのように地域交流軸とか地域連携軸というような言葉がよく言われていますが、はてさて一体何をするのかということになりますと、なかなかこれをやったらいいというような物が見つからないわけです。今日のお話は鳥取のお話でしたから、コメンテーターの小谷さんの方からも東中国四国の連携軸というようなお話もありました。それで鳥取・松江から高知までずっと連携軸を通したとしても、量的にはそんなに動かないわけです。量的に動くのはやはり近い距離の交流しか出てこないわけでした。高知と松江とか高知と鳥取というようなことになりますと、量的な問題ではなくなり、もっと質的に何か意義のあるこ

とを出さなければならない。しかしそういうものはなかなか出てこないということで、行政の担当者は大変困っているということ、私もある県の担当者から聞いたことがあります。そういうことに対してどういう答えを出すのかなというのが私の興味であったわけです。その点につきましては、野津さんの発表では、交流人口指標の設定ということで、ある意味では非常に真面目に地道に問題に向かわれたのではないかなと思います。ただ私が聞いていまして少し残念だったのは、交流人口指標をどういう考え方でそれを設定したのか、あるいは具体的にそういう交流連携の概念から、どういうものを交流連携指標の軸にしようかというふうに持ってくるプロセスの考え方と、それとは別に具体的に図る物差しとして何を持ってくるかということについていろいろご苦労されたと思うわけです。そのあたりの話が残念ながらあまり聞かれませんでした。専らどちらかというと交流の現状、あるいは一般的な意味での社会的な意味といったような報告が中心のように思いました。これに対しまして小谷さんのコメントでは、そういうどちらかと言えば型にはまったような基礎調査に対して、ご自分の体験で今進められている交流の実態について、非常に生き生きとしたお話を聞かせていただいたかと思えます。ある意味でこれには行政の取り組みと民間の取り組みとのニュアンスの差というようなところが表れたかなと思いますが、地域交流あるいは地域連携というのは何をすることかということにつきましては、これは私の偏見あるいは好みの問題かもしれませんが、そういう問いに対する議論としては私は小谷さんのような話の方が好きでした。但しああいう話ではなかなか行政に受け取ってもらってレポートにはならないと思います。そのあたりはシンクタンクの皆さんが大変ご苦労されるところではないかなと思います。

二番目は「愛媛の内航海運」の発表です。私も松山にいますのでいろいろ皆さんとお話していますが、大変綿密によく調べています。IRCはこれを県内の地場産業につきまして順番にシリーズとしてやられており、私は大変好感を持っているところです。他の中国四国地方のシンクタンクはたくさんあると思いますが、伊予銀さんの場合は自社の自主的な研究調査活動であり、そういう意味での良さが出てきているシリーズの発表かなと思いました。先に申しました鳥取の場合ですと、鳥取県からの受注であるということ、そういう点で思う存分研究の幅を自分で広げていくことがやりづらかったところがあるかと思えます。その点では差し出がましいことかもしれませんが、他の地域のシンクタンクでもいくつか自主研究を進めて頂けたらと思います。内容については、これはコメンテーターの若井先生からのお話にもありましたように、もう少しオーナーの行動についても行動モデルというようなところまで踏み込めば、大変面白いのではないかなと思います。ただそういう点では元々やはり銀行のお仕事をされている方だろうと思えますし、また実際の業務活動の中のことでいろいろ困難があるのかもしれない。せつかくここまで要因を突き詰めていますので、もう一步頑張つて行動モデルと、それに対する統計的な分析というふうになっていけば面白かったのではないかなと思います。

それから最後の「岡山の水利用について」ですが、これも自然的な条件と工業用水、

農業用水、生活用水についての実態が大変よく分かりました。高梁川の水利用について、大変特徴的な問題があることを明らかにして頂きまして有益だったと思います。私自身も一昨年の渇水に大変悩まされまして、一頃は19時間断水が3か月位続きまして、これは岡山県よりももっとひどかったわけです。これは自慢にはならないお恥ずかしい話ですが、そういうことで私自身も渇水に関連しましていくつか勉強しました。コメントーターの内田先生が、私の言いたいこともかなり言って下さったわけですが、全体的な水循環あるいは水代謝ということ、もう少し系統的に明らかにして頂きたいと思います。それからフロアからのご質問も頂きましたように、やはりダムによる安定供給の問題もあります。そういうことで、ある平均的な渇水時期のような場を想定しまして、その時点における流域全体としての水代謝、水環境というようなものを明らかにしていけば、かなりシステムティックな取扱いができるのではないかと思います。幸いお隣に内田先生がいらっしゃいますので、内田先生にお尋ねすれば、だいたいのことは出来るだろうと思いますので、それを是非やって頂ければと思う次第です。最後の方に景観といいますが、親水のことにも触れていましたが、水の需給については大変な問題でして、河川維持用水にあたると思いますか、あるいは我々が川の水辺で、渇水の時期でも、ある程度川に関連したレクリエーション活動をしようとする、やはり水質が3ppmか5ppmくらいでなければならない。そういうようになると河川維持用水というか、それだけの水質を維持する為のうすめ水の量というのは相当な量に上がるわけです。そういう我々の身の回りの水の河川の水質も考慮するような全般的な水環境あるいは水管理というのを考えて頂きたいと思います。

最後に一言全般にわたる私の印象を申し上げさせて頂きたいと思います。この会は機本先生の大変なお骨折りによりまして、中四国の地方のシンクタンクがお互いに交流する場を設けていただいたわけですが、そういうことの成果は年々現れていると思うわけですが、今日の三人の発表を聞いていますと、残念ながら皆さんどうも県の枠に入っておられまして、鳥取の発表につきましては鳥取県の交流ということについては大変お詳しくお話して頂きましたが、では周りの県はどうか、周りの県と比較した時に鳥取はどうかということになると、少しそういう点が弱かったのではないかと思います。そのことにつきましては、流石にコメントーターの小谷さんから他県の実情はどうなっているのかというご質問がありました。それから二番目の内航海運につきましては、これは最初に発表者の方が愛媛県は広島県と並んで全国有数の内航海運の集積地だと言われました。ならば何故愛媛と共に広島も取り上げてやらなかったのか、おそらく船主というのは東京に本社があるような大会社の船持ちがいます。その地方の船持ちさんの中にもまた愛媛と広島が違うところがあるのかもしれないし、あるいは一緒かもしれませんが。そういうことを考えますと、もう少し愛媛だけにとらわれずにせめて広島は一緒に対象にして分析をして欲しかったなと思います。最後の岡山の水需給の問題につきましても、先程私が触れましたように、平成6年の渇水というのはやはり岡山より愛媛と

か香川はもっともつきつかったわけです。私も6年に岡山に行きまして、岡山大学の先生方といろいろお話をしましたが、岡山はいいねと言って帰ってきたわけです。もう少しそういう面では、折角の機会ですから香川とか愛媛とかもつきつかった所を、広島も濁水の被害にあったと思いますが、そういう所の状況あるいは対策といったものも詰めて頂ければ大変有り難かったのではないかと思います。そういうことで各県の枠にとらわれずに、やはりもっと広域的に研究して頂ければ、もっともついい研究になるのではないかなと思った次第です。



## 閉 会 挨拶

広島大学経済学部附属

地域経済研究センター長 櫛本 功

昨日今日と2日間に渡りまして、今年度2回目の研究集会を開かせて頂きました。全体で申しますと第8回ということになりますが、大変皆様方にはご協力を頂きましてありがとうございます。昨日も大変たくさんの方がお見え頂いたわけですが、今日も吉村先生と柏谷先生のご講評をお聞きしましても、大変素晴らしいご報告をされ、且つ素晴らしいコメントがあつて議論が伯仲しなかなか盛り上がったように思いました。8回目ということですが、これからも長くやっていき、シンクタンクの方々のまさに交流ということを念頭に置いてこの会をやらせて頂いていますので、これからもシンクタンクの特徴を発揮されまして、交流が盛んになって行けばなと思っていますところ。いずれにしても報告者の方々、座長の方々、コメンテーターの方々、大変ご協力を頂いてありがとうございました。今後とも宜しくお願い致します。

ありがとうございました。